

日本人類学会進化人類学分科会

ニューズレター

2019/9



目次

次回シンポジウム

第 44 回シンポジウム「父系社会再考：ヒト亜科とクモザル亜科の比較研究」	2
---------------------------------------	---

2019 年度開催シンポジウム記録

第 43 回シンポジウム「“セクハラ” の進化人類学はどこまで可能か？」	3
--------------------------------------	---

鈴木 滋（龍谷大学国際学部）

「趣旨説明 “セクハラ” の進化人類学はどこまで可能か？」	4
-------------------------------	---

高畑 由起夫（関西学院大学名誉教授）

「霊長類の性と暴力：“sexual coercion” をめぐる進化生物学」	6
--	---

橋本 千絵（京都大学霊長類研究所）

「ボノボ・チンパンジーにおけるオスからメスへのハラスメントについて」	13
------------------------------------	----

田島 知之（京都大学大学院理学研究科）

「オランウータンにおける性行動の強制」	16
---------------------	----

中村 美知夫（京都大学大学院理学研究科）

コメント 1：「セクハラ」と「暴力」と異性間の「優劣」	20
-----------------------------	----

宇田川 妙子（国立民族学博物館）

コメント 2：むしろ、ジェンダー研究を進化論から見直すために	23
--------------------------------	----

表紙写真：メスを押さえつけてのアンフランジオスによる性器検分、このまま強制交尾に移行することがある。

（写真撮影：田島 知之）

次回シンポジウム

第44回シンポジウム

「父系社会再考：ヒト亜科とクモザル亜科の比較研究」

日時： 2019年 10月 12日（土）9:00-12:00

場所： 佐賀大学本城キャンパス A 会場 教養教育 大講義室（佐賀市）

オーガナイザー：古市 剛史（京都大学霊長類研究所）

ヒトとの共通祖先であるアフリカ類人猿がいずれもヒトの狩猟採集民に多く見られる父系社会的傾向を示すことから、その進化についてさまざまな仮説が示されてきたが、未だ決定的な答えは得られていない。本シンポジウムでは、遺伝学、行動学の新しい研究も加え、また検討の対象をヒト亜科とクモザル亜科に広げることにより、父系社会の成立要因を再考する。

講演

石塚 真太郎（京都大学霊長類研究所）

『アフリカ類人猿の地域個体群全体の中での血縁オスの分布』

戸田 和弥（京都大学霊長類研究所）

『父系型社会におけるメス集団間移籍の至近的要因』

下岡 ゆき子（帝京科学大学自然環境学科）

『クモザル亜科における父系社会の多様性』

諏訪 元（東京大学総合博物館）

『ラミダスと、ヒトと類人猿の共通祖先像について改めて考えてみる』

古市 剛史（京都大学霊長類研究所）

『何がヒト亜科とクモザル亜科の父系社会を進化させたのか』

総合討論

総会

「“セクハラ”の進化人類学はどこまで可能か？」

2019年6月22日(土) キャンパスプラザ京都5階・第2演習室(京都市)

オーガナイザー：鈴木 滋(龍谷大学)

鈴木 滋(龍谷大学)

「趣旨説明」

高畑 由起夫(関西学院大学名誉教授)

「霊長類の性と暴力：“sexual coercion”をめぐる進化生物学」

橋本 千絵(京都大学霊長類研究所)

「ボノボ・チンパンジーにおけるオスからメスへのハラスメントについて」

田島 知之(京都大学大学院理学研究科)

「オランウータンにおける性行動の強制」

コメント

中村 美知夫(京都大学大学院理学研究科)

宇田川 妙子(国立民族学博物館)

(趣旨説明)

世界中で論争を巻き起こしているセクハラ問題の背景を考えてみたい。動物行動学の進歩によって、さまざまな動物種でのオスメスの社会関係が明らかになって、霊長類でも多様なオスメスの優劣が知られている。そこで、今回は、オスメスの優劣関係や「ハラスメント」のヒトにつながる進化を考えるために、サルやチンパンジーやボノボ、オランウータンなどのオスメス関係に注目する。一般的には、サル社会ではオスがメスよりも社会的優位とされることが多いが、じっさいにはオス優位がはっきりしない種や種内での多様性もある。また、人類でも妻が夫を叱り飛ばしたりするような具体的な事例にはことかかないが、多くの社会では男性の優位性が問題になることが多い。そこで、オスメスの優劣にかかわる社会関係について、人類進化的な検討をしてみたい。進化を考えるにあたって、単純に、生得的な交渉パターンとして考えるのではなく、個体間の齟齬、社会的な影響なども考慮して、共存にともなう社会的な生成として、セクハラを含む社会交渉を理解することは可能だろうか。こうした、サルとヒトの行動を理解する視座にも、検討をくわえることも期待したい。

世界中で論争を巻き起こしているセクハラ問題の背景を考えてみたい。動物行動学の進歩によって、さまざまな動物種でのオスメスの社会関係が明らかになって、霊長類でも多様なオスメスの優劣が知られている。そこで、今回は、オスメスの優劣関係や「ハラスメント」のヒトにつながる進化を考えるために、サルやチンパンジーやボノボ、オランウータンなどのオスメス関係に注目する。進化を考えるにあたって、単純に、生得的な交渉パターンとして考えるのではなく、個体間の齟齬、社会的な影響なども考慮して、共存にともなう社会的な生成として、セクハラを含む社会交渉を理解することは可能だろうか。こうした、サルとヒトの行動を理解する視座にも、検討を加えることも期待したい。

「セクハラ」という言葉は、日本では30年ほど前から使われるようになった外来語セクシャル・ハラスメントの略語である。この言葉は、朝日新聞では1988年に記事に初登場し、1989年には東京版の記事には11件しか使われていないが、その年の「新語・流行語大賞」の新語部門金賞を受賞し、急速に広まった流行語である。1999年には275件であった東京版の記事数は、2018年には822件に増えており、日常的に使われる言葉になっている。とくに2018年に日本でも始まった「#MeToo運動」は、セクハラ被害を広く訴え、社会改革を求める運動として、世界中のさまざまなメディアで取り上げられたことは記憶に新しい。

霊長類研究においては、こうした流行以前の、野外研究の当初から、オスメス間のハラスメントに相当する交渉は知られていた（本シンポの高畑論文）。一般にサル社会ではオスがメスよりも社会的優位とされることが多いが、じっさいにはオス優位がはっきりしない種や種内での多様性もある。ニホンザルでは、オス間やメス間に厳しい順位序列があることが強調されたので、オスメス間でもオスの優位がは

っきりしていると思われがちであるが、オスメス間では優劣が不明瞭で、とくに若いオスは、メスに攻撃的な行動をしても、他のメスからの援護をうけたメスによる反撃をされることが普通である（Suzuki, 1991）。とはいえ、多くの場合オスからメスへ攻撃（威嚇）があり、とくに発情したメスへの攻撃が多く、しかも正当な理由が見当たらないケースも含まれ、メスがそれを嫌がったり反撃したりすることから、ヒトとの共通性を印象づけることになる。

一方、1980年代以降の急進的な社会生物学では、ヒトのセクハラ、とくに殺人やレイプを含む暴力性を、適応的な進化の帰結として理解しようとする研究がすすんだ。たとえば、チンパンジー研究者のググリエリ（2002）は、レイプは類人猿の祖先から受け継いだ自然淘汰の競争に勝つための能力であって、男の攻撃性はDNAによってプログラムされているという主張をしている。こうした極端な遺伝子還元主義的な性暴力の理解は当然多くの批判をまねいたが、日本ではほとんど論争になったことはない。

社会学では「セクハラ」は男性による女性差別の一環として、フェミニズムやジェンダー論の枠組みで、日本でも盛んに研究されてきた。現在進行中の社会的な問題を扱うために、その分野は広く、かつ深刻な内容を含んでいる。しかし、こうした問題をヒトの進化の問題として、自然主義的に理解するという方向の研究や議論はあまりみられない（本シンポの宇田川コメント）。たとえば、雑誌『現代思想』の2018年7月号は、「特集 性暴力=セクハラ—フェミニズムとMeToo」として18件の論考があるが、私見では、性暴力の自然主義的な理解はひとつとして含まれていなかった。

とはいえ、男女関係の社会的な成立要因を強調するジェンダー論者といえども、ヒトの行動の進化的理解を無視することはできないはずである。じっさい女性差別的な社会を積極的に批判してきた社会学

者の上野千鶴子は、「自ら変わろうとする男性はほぼいません」と言い切り、男性の意識や行動が容易に変わらない性質であることを認める発言をしている（朝日新聞 2018 年 2 月 21 日）。また、そもそも上野も自身の研究の初期には、動物行動学的な男女の行動理解を前提として、性イメージの社会的構築を論じていたのだ（上野, 1982）。

こうしたギャップを架橋できる視座はないのであろうか？もちろん、生物学的なセクハラを理解は、性暴力などの社会悪を正当化する含意をもつので主張しにくいというのはあるだろう。このシンポの企画段階でも、そうした危惧を理由に協力をしぶる研究者も少なくなかった。しかし、セクハラがすべて環境や教育によるものとするのは無理があり、昨今の進化人類学にかかわる研究は、行動のみならず DNA や脳科学などの知見も加わって、かつて考えられていたよりもはるかに遠くまで展開していることを考えると、このギャップを埋める試みの機は熟しているはずである。今回のシンポは、その端緒となる試みで、今回だけで納得がいくテーマではないだ

ろう。シンポには 20 名弱の参加がえられ、類人猿をはじめとして、サルが多様な「セクハラ」のありようについての報告と、ヒトとの接点をめぐる、活発で濃厚な討論が行われた。今回の挑戦的なシンポに発表・参加された皆さんに感謝の意を表すとともに、以後のさらなる展開には読者のみなさんの協力も仰ぎたい。

参考文献

- ギグリエリ マイケル P. (2002) 『男はなぜ暴力をふるうのか—進化から見たレイプ・殺人・戦争』（松浦俊輔訳）朝日新聞社.
- Suzuki S. (1991) Dominance relationships of young males in a troop of Japanese monkeys in Yakushima, Japan. In: Ehara A, Kimura T, Takenaka O Iwamoto M, (eds.), *Primateology Today*. Elsevier, pp. 133-136.
- 上野千鶴子 (1982) 『セクシィ・ギャルの大研究 女の読み方・読まれ方・読ませ方』光文社.

彼（磯崎正富翁）は蓬髪の下の額に皺を寄せて、いやにまじめな顔つきで言った。
「コンやつらは夫婦（つれ）になると、仲が悪くなるとじゃありませんか、先生？ どうも、そげんな節があると、わしはみちよりますがの。おかしなもんですぞ」
連中の心理は解せないが、これは重大な発見ではないか、といった様子である。
「男どんと夫婦になると、メスはたいてい、ハア、がっぷり噛まれますけんの」
「そうですね」とわたしは相槌を打った。たしかにそんなところもあるにはあった。暴力で相手のメスを自分の意に従わせようとするのである。
（徳田喜三郎『幸島のサル・その性行動』）

1. はじめに

Sexual coercionとは、アヌビスヒヒを描いた“Sex and friendship in baboons”（1985）で知られるSmutsが、Trivers（1985）が提唱した繁殖戦略理論に基づき、それまで断片的に語られてきた霊長類の性と攻撃を統一的に理解するため、創った概念です（Smuts & Smuts, 1993）。性的威圧（中川・岡本, 2003）、性的強制（田島・マリム, 2018）または性的強要（赤澤・脇, 2016）等に訳されていますが、「メスに“force/threat of force”で交尾を強いるとともに、他のオスとの交尾を妨げる繁殖戦略」を意味し、いかにも“セクハラ”の進化人類学」にふさわしい話題です。

さて、1970年代に嵐山で始めた私の研究史を振り返ると、「性に広義の攻撃性が感じられる」ことは出発点の一つでした。とくに印象的だったのがメスの性的積極性（proceptivity; Beach, 1976）です。同時に、オスが時にはサディスティックなまでに、発情したメスを攻撃することも目の当たりにしました（これが狭義のsexual coercionにあたります）。マハレのチンパンジーでも、発情メスが分散するオス

たちを探し回り、交尾し、立ち去る姿にやはりメスの性的積極性を感じながら、子殺し等ではオスのまぎれもない暴力性²に直面します。

とくにヒトとの違いを感じたのは、ニホンザルの性の“非日常性”でした。メスは発情しない限り、オスと交渉を持たない。そもそもそばにいない／出会わない（Mori, 1977）。その点、発情とは“効率的な繁殖”をめざし、オスに排卵を知らせる信号にほかなりません。メスはオスを“排卵の隠蔽（concealed ovulation）”で操作し、好みのオスを選択しますが（female choice）、同時にオスからの攻撃リスクに直面します。一方で、そうした構図は交尾季の、しかもメスの発情という時間的枠組みに限られたものとして印象づけられました。

2. Sexual coercion とは何か？

Smutsの問題提起は、アヌビスヒヒのメスが頻繁に“いわれのない（unprovoked）攻撃”を受けることがきっかけではないかと思われます（Smuts, 1985のTable 6.2）。こうした非性的文脈での理不尽な攻撃を理解するため、発情という時間的枠組みにとら

¹ 広辞苑（第5版）は暴力を「無法な力」としますが、サルに“法”はありません。それゆえ暴力という表現を躊躇うところですが、あえてタイトルにします。

² 私の観察例では、犠牲者の母親は発情再開後、我が子を殺した α オスも含めて複数のオスと交尾、妊娠・出産します。

われず、「究極的にはオスの繁殖成功に寄与する攻撃行為」として一括する³。この枠組みならばハヌマン・ラングールの子殺し (Hrdy, 1977) もマントヒヒのオスによる neck-bite⁴ (Kummer & Kurt, 1963) もあわせて理論の俎上にのせられる。その結果、サルたちの (非性的な) 日常にも様々な性的思惑を読みとることができます。かつて私はニホンザルの性を日常 (非発情) と非日常 (発情) に峻別し (それゆえにこそヒトの性との対比が浮かび上がったわけですが)、性と親和性の関係を論じましたが、性と暴力との関係では、どうやらサルもすでに性の日常化=汎化が少しずつ進んでいるらしい。その延長にヒトのセクシャリティがあるはずです。

その後、Clutton-Brock & Parker (1995) は sexual coercion を 3 タイプに分け、進化生物学的ベネフィットとコストを論じます。①forced copulation (物理的に交尾を強いる)、②harassment (交尾を求めてメスをハラスメント)、③intimidation (拒絶するメスを“punish”して、将来⁵の交尾成功を狙う) です。Muller et al. (2007) はさらに④mate-guard (発情メスを“所有”、他のオスとの交尾を妨害) を付け加えます。また、⑤infanticide も含めてよいでしょう (van Schaik et al., 2004)。なお、ヒトの rape に該当する forced copulation はオランウータン以外ではほとんど観察されない、という点はどの研究者の意見も一致します。

3. その後の研究の進展

(1) ヒヒ

チャクマヒヒでは Kitchen et al. (2009) がオスの攻撃について、redirected aggression 説 (攻撃

は機会的) や male-male competition 説 (優位性や攻撃能力をメスやライバルに発信) と比較し、攻撃は機会的ではなく、メスへの抑圧と他のオスへの印象付けの機能を持つとして mating conflict/sexual coercion 説を支持しました。

一方、性的二型によってハンディキャップが課せられたメスも、“best-of-a-bad-job”として ARTs (Alternative reproductive tactics; Setchell, 2008) を展開します。①反撃以外に、②オスを性的に受け入れてリスクを軽減 (子殺し後の発情等)、③攻撃的な高順位オスを配偶者に選択 (sexy son 仮説にもあてはまるかもしれません)、④オスの振る舞いで自らが所属すべき集団を選択、⑤メスの連合でオスに抵抗、⑥特定のオスと親和的関係を結び庇護者を確保 (Palombit, 2009) 等です。

(2) チンパンジー

チンパンジーでは意見がやや分かれます。Kibale の Kanyawara community で調査した Muller ら (2007 等) は一貫して sexual coercion を重視します。メスは最大腫脹時に頻繁に攻撃を受け、その 65% は直接の接触に至らないとは言え、しばしば負傷します⁶。かつ、オスによる攻撃とそのオスとの交尾の頻度は相関します。Muller らは、オスの攻撃は「父性を混乱させよう」とする female choice への対抗戦略とします。一方、forced copulation が滅多に起きない理由は「メスが徹底的に抵抗することがほとんどない」とします。

対照的に、Côte d'Ivoire の Taï では female choice が重視されます (Stumpf & Boesch, 2005 等)。まず、direct coercion は性的交渉の 11.6% でしか起

³ Smuts 自身が認めるように、求愛と coercion や“性”の定義・線引きには常に曖昧さがつきまといます (Smuts & Smuts 1993, p.7)。

⁴ シンポジウムでは、neck-bite の儀式性を強調し、coercion にあたらないとする意見がよせられました。しかし、オスにとって儀式化は攻撃コストの低減であり、むしろ coercion の効率を高めていると考えられるべきかもしれません。

⁵ それでは、どのくらい将来か? グドール (1971) は、あるチンパンジーのオスの執拗な harassment を描写し、「彼の執拗さは、ついに 2 年後に報われた」としています。

⁶ シンポジウムで、マハレではメスは攻撃で直接噛まれるより、逃走する際に耳等に傷を負うことが多いとのコメントがありました。しかし、理論的には、直接噛むかどうかは重要ではありません。そうした状況に追い込むこと自体が coercion であり、それが将来的に female choice に影響するかどうか議論の焦点です。

きません。攻撃的なオスはメスに好まれず、繁殖成功は高くありません。メスは、受胎しやすい排卵周辺には好みのオスと交尾しながら、他の時期は多数のオスと乱婚的に交尾するという混合戦略 (mixed strategy) を展開し、coercion の影響は少ないとします。

この2つの生息地は別亜種に属しますが、Kaburu & Newton-Fisher (2015) は同一亜種に属する Budongo の Sonso community とマハレの M-group を比較しました。その結果、①Despotic な Sonso では交尾頻度が多いオスが攻撃頻度も高い。しかし、②Egalitarian/tolerant なマハレではそうした傾向は認められない。③Sonso (おそらく Kanyawara も) では coercion が機能するが、マハレでは grooming と交尾の trading が重要である、と結論しています。

(3) ボノボ

大型類人猿で唯一 sexual coercion の影が薄い存在です。Paoli (2009) は、①coercive aggression が観察されない。②攻撃頻度と交尾頻度が相関しない。③メスの優位性が female choice を可能にしている、とします。

(4) オランウータン

よく知られているように、ヒト以外の霊長類では例外的に rape/forced copulation が報告されています (Mackinnon, 1974)。これは不利な立場にある unflanged male による代替戦術のようです (Fox, 2002)。

Stumpf et al. (2008) はチンパンジーとの比較で、共通点に①メスは受胎しやすい時期に好みのオスと交尾し、受胎しにくい時期に乱婚になる混合戦略をとる。②両種ともオスの誘いかけに抵抗する等をあげます。相違点では、③チンパンジーのメスは生殖器を腫脹させるが、オランウータンは腫脹しない。④交尾頻度はチンパンジーが圧倒的に高いが、forced copulation が稀である等があります。

(5) ゴリラ、集団内での moderate な攻撃と、集団外からの子殺し

ゴリラの社会は単雄集団が基本ですから、集団への帰属自体が配偶者選択に直結します。しかし、集団内では、①メスへの攻撃は性周期・妊娠中に多く、②交尾の観察日は攻撃も多いなど、攻撃が性に連動します。もっとも、③攻撃の大半は moderate で負傷は滅多になく、④forced copulation も稀です。大きな性的二型は脅しだけで効果的かもしれません (Robbins, 2009)。

一方、集団外のオスは子殺しするかもしれない危険な存在です (Fossey, 1983)。このようにオスは性的二型による潜在的攻撃性をベースに、集団の内と外とで庇護者と子殺しという二面性を示します。集団オスはメスにとって、集団外からの攻撃への庇護者かもしれません。

(6) sexual coercion はどの霊長類でも認められるか？ そして female choice の否定か？

このように、種によって sexual coercion の頻度には変異があるようです。ボノボや Barbary macaque (Taub, 1980) ではほとんど認められません。2009 年出版の “Sexual Coercion in Primates and Humans” がとりあげた対象もヒヒと類人猿、ヒトに偏っている印象があります。ただし、これは sexual coercion が例外的現象であるということの意味するわけではなく、種によって性の様相が大きく異なり、coercion のあらわれ方も変異があることなのだろうと思います。

変異に関連する要素としては、①性的二型、②繁殖季節性、③発情、④社会構造等があげられます。性的二型は原猿類、広鼻猿類、狭鼻猿類の順に拡大しますが (Dixon, 1998)、前二者では sexual harassment は稀です。しかし、狭鼻猿類では harassment の報告が増えます (van Schaik et al., 2004)。繁殖季節性では、交尾季に多数のメスが同時発情すると、高順位オスのコントロールが効かなくなるかもしれません。また、メスは性皮の腫脹や発情の長期化等で、排卵を顕示／隠蔽して、オスを操作します。さらに単雄集団では集団への帰属が配偶者選択に直結する一方で、複雄集団では他のオスの存在が行動を左右します。なお、父系集団ではオス間の血縁度

が高く、オス同士の行動に影響するかもしれません。

性選択理論での位置づけとして、Smuts & Smuts (1993) は male competition と female choice に つぐ 3 つめの形式とします。一方、Muller ら (2007 等) は、Kanyawara community では active female choice は大きな役割を果たしていないと強調しています。

4. ヒトの性をめぐるいくつかの議論

(1) 現代における性暴力

最後に、ヒトの性暴力についても触れましょう。現代日本での性と暴力について、『男女間における暴力に関する調査報告書＜概要版＞』（内閣府 2018）による 20 歳以上の女性 1807 人、男性 1569 人の回答から一部を抜粋します。

- ①配偶者からの暴力被害：対象 2485 人中 26.1%（3 回以上 9.7%、1～2 度 16.4%）
- ②配偶者からの暴力被害で命の危険を感じた：650 人中 10.9%（女性 15.0%、男性 3.1%）
- ③交際相手からの暴力被害：1833 人中 16.7%（女性 21.4%、男性 11.5%）
- ④同居する交際相手からの暴力被害：250 人中 42.8%（女性 57.4%、男性 27.3%）
- ⑤強制的性交の経験：3376 人中 4.9%（女性 7.8%、男性 1.5%）

少なからぬ回答者が性暴力被害を受けていますが、とくに「同居する交際相手からの暴力」の 42.8% という数値は「恋愛にともなうリスク」を示唆して、印象的です。

以下、性的暴力と関連する可能性がある項目に触れます。

(2) ヒトでの性的二型

Smuts 以来の議論は「メスはオスからの攻撃に vulnerable」なことが前提です。その背景に性的二型が潜みますが、現代人はどうでしょう？

1950～2007 年の 20 歳の日本人で、男性の身長を女性の数値で割った値は 1.08、体重は 1.18 でした。この数値を Dixson (1998) の表で比べると、狭鼻猿類 73 種中、下からほぼ 1/3 程度です。性的二型は比

較的小さいのに、sexual coercion が著しく、強制的性交が稀でないことこそヒトの特徴かもしれません。

(3) 排卵の隠蔽と発情の喪失による性の日常化

ヒトの女性には他の霊長類のメスと違い、性が月経周期に影響されないとされてきました。その実態について多数の研究がありますが、実は、必ずしも首尾一貫した傾向は認められません (Steklis & Whiteman, 1989)。とは言え、ごく大まかに、①女性にはチンパンジー等が示す排卵の顕示がない（発情の喪失）。②性周期でまったく non-receptive な時期がない。③排卵ごとの妊娠率はワオキツネザルやニホンザルに比べれば低い等は確かでしょう。性から生殖との直接的つながりが薄れる一方、時間の枠組みから比較的自由になっているようです。

こうしたヒトの女性の receptivity の拡大には二つの可能性があります。一つは「常に発情して性交が可能」とします。もう一つは「発情自体は失われ、発情していないけれどもいつでも受容する」とするものです。榎本 (1990) は後者の立場から、女性の性を「随時的性的受容」と形容しています。それはヒトにおいて性が日常化＝汎化が進んだことを示しますが、それがまぎれもなく sexual coercion の汎化＝日常化にも結びついているわけです。

(4) 子作りと子育ての両立：ルールと罪の登場

視点を育児に広げましょう。哺乳類のメスにとって、「子作り」と「子育て」のバランスは大きな課題です。多くの霊長類はメスのみが子育てしますが、成長に時間がかかると依存期間が長期化するため、出産間隔が伸びて母親の生涯繁殖成功が減ります。チンパンジーでは出産間隔が 6 年にもなります。

この“母”と“繁殖雌”の二重性 (Lancaster, 1991) に、ヒトは“家族”の発見・構築で対処します。この機微を Hrdy (1999) は「長い出産間隔は類人猿の母子の共進化における基本的な特徴だった」としながら、「数万年、数十万年と経つにつれて、ヒト科の母親はもっと短い間隔で出産するようになった」。それは「父親や親代わりから協力をどれだけ引き出せるかにかかっていくことになった」とします。

Lancaster (1991) はさらに女性は男性からの世話や保護等の見返りに、子供の父性を保証する“性的契約”に縛られたとします。こうした過程で、性を家庭内に封じ込めるために様々なルール／法が生まれます。その上、そこからの逸脱阻止のため、“罪”と“罰”も定められます。マントヒヒの neck-bite がついに法的保証を獲得するのです。sexual coercion はそれらのルールの背景にあるとも言えますが、同時に、ルール破りの原動力の一つなのかもしれません。

(5) 父性の保証：父になること、そして性を管理すること

ヒトはまた「性と血縁の問題については執拗なほどの関心」を示し(リーチ, 1980)、社会的・遺伝的系譜の一致を望みます。しかし、排卵の隠蔽も手伝い、女性自身も自子の父性に確信を持てません。そのためか、民族ごとに生殖理論が編み出されます。例えば、東アフリカの半農半牧民チャムスでは「女性の経血と男性の精液が女性の内性器で混じることにより胎児がつくられる」とします(河合, 1994)。

チャムスでは、既婚女性の多くが“ランガターンガンガタ”と呼ばれる愛人関係を結びますが、女性たちは生殖理論をもとに夫、あるいは愛人の子供を宿すか勘案します(河合, 1994)。しかし、この理論は医学的に誤りなので、女性が「愛人の子」と信じている子供が「夫の子」の可能性も生じます。

一方、夫は妻の姦通を許さず、暴力も辞しません。とくに女性が妊娠した場合は社会問題化します。「かつては姦通による子どもは存在を許されず、墮胎や嬰兒殺しの対象となった」。「嬰兒殺しは現在ではなくなったものの、夫たちが姦通で生まれた子どもをどうにも許せない(河合, 1994)」のは変わりありません。河合は「婚外の性そのものを問題とするのは常に夫なのである」として、「法が婚外の性を扱いきれないがゆえに、夫が自ら妻の性と生殖を“管理”しよう」としながら、「彼もまた姦通そのものに対しては無力なのだ」と結びます。家畜の繁殖を管理することに長けた遊牧民の男系社会で、男性が女性の性を管理しきれない現実的印象的です。

一方、南アフリカの砂漠地帯に住む採集狩猟民サンの社会でも、“ザーク”と呼ばれる婚外性関係が存在します。菅原(1994)はそこで「妻が婚外性関係の結果産んだ子どもを、夫が自分の子どもとして養育する」例が少なくないことを知ります。しかし、夫は懲罰と受け入れるわけではありません。婚外性関係で生まれたと信じている子どもに、恨みを託した名前(「斧で殴る」、「ナイフを研ぐ」等)をつけます。しかし、何より印象的なのは「夫はその子が生まれると、強い愛着の絆をはぐくむ」ことです。菅原はそこにサン社会の「同意し合う／受け入れあう」というキーワードを感じるとともに、生物学的な「異性を獲得し、自分の子孫をつくるための絶えざる競争という性のイメージ」の相対化を訴えています。

サル社会では、“繁殖”という目的のために雌雄間の様々な駆け引きが発達してきましたが、ヒトではさらに自分と配偶者、そして子供たちを社会的枠組みにはめ込むために様々なルールが発達し、それが罪と罰の規定も創るに至ります。その一方で、ルール破りもまた様々な進化していくという“軍拡競争”が続いているのかもしれない。

参考文献

- 赤澤淳子, 脇忠幸 (2016) 「国内におけるデートDV : 研究のレビューと今後の課題」 福山大学経済学論集, pp. 128-146.
- Beach F.A. (1976) Sexual attractivity, proceptivity, and receptivity in female mammals. *Horm Behav* 7:105-138.
- Clutton-Brock TH & Parker GA (1995) Sexual coercion in animal societies. *Anim Behav* 49:1345-1365.
- Dixon AF (1998) *Primate Sexuality*, Oxford Univ Press, Oxford.
- 榎本知郎 (1990) 『愛の進化』 どうぶつ社.
- Fossey D (1983) *Gorillas in the Mist*. Hodder and Stoughton, London.
- Fox EA (2002) Female tactics to reduce sexual harassment in the Sumatran orangutan (*Pongo*

- pygmaeus abelii*) Behav Ecol Sociobiol 52: 93-101.
- グドール・J (1971)『森の隣人』(河合雅雄訳) 平凡社.
- Hrdy SB (1977) The langurs of Abu. Harvard Univ Press, Cambridge.
- Hrdy SB (1999) Mother Nature: A History of Mothers, Infants, and Natural Selection. Ballantine Books.
- 伊谷純一郎, 徳田喜三郎 (1958)『日本動物記第3巻 幸島のサル・その性行動』光文社.
- 河合香吏 (1994)「チャムスの民族生殖理論と性: 欺かれる女たち」高畑由起夫編『性の人類学』世界思想社. pp. 160-203.
- Kaburu SSK, Newton-Fisher NE (2015) Trading or coercion? Variation in male mating strategies between two communities of East African chimpanzees. Behav Ecol Sociobiol. 69:1039-1052
- Kitchen DM, Beehner JC, Bergman TJ, Cheney DL, Crockford C, Engh AL, Fischer J, Seyfarth RM, Wittig RM (2009) The causes and consequences of male aggression directed at female chacma baboons. In: Muller NM, Wrangham RW (eds.) Sexual Coercion in Primates and Humans, Harvard Univ Press, pp. 128-156.
- Kummer H, Kurt, F (1963) Social units of a free-living population of hamadryas baboons. Folia Primatologica, 1: 4-19.
- Lancaster JB (1991) A feminist and evolutionary biologist looks at women. Yrbk Phys Anthropol 34: 1-11.
- リーチ・E (1980)「処女懐胎論争」『神話としての創世記』(江河徹訳) 紀伊國屋書店.
- Mackinnon J. (1974) The behaviour and ecology of wild orang-utans (*Pongo pygmaeus*) Anim Behav 22: 3-12.
- Mori A (1977) Intra-troop spacing mechanism of the wild Japanese monkeys of the Koshima troop. Primates 18: 331-357.
- Muller MN, Kahlenberg SM, Thompson ME, Wrangham RW (2007) Male coercion and the costs of promiscuous mating for female chimpanzees. Proc R Soc B 274, 1009-1014.
- 内閣府男女共同参画局推進課 (2018)『男女間における暴力に関する調査報告書<概要版>』(http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/h29danjokan-gaiyo.pdf)
- 中川尚史, 岡本暁子 (2003)「ヴァン・シャイックの社会生態学モデル: 積み重ねてきたものと積み残されてきたもの」『霊長類研究』19: 243-264.
- Palombit R (2009) Friendship” with males: a female counterstrategy to infanticide in chacma baboons of the Okavango Delta. In: Muller NM, Wrangham RW (eds.) Sexual Coercion in Primates and Humans, Harvard Univ Press, pp. 377-409.
- Paoli T (2009) The absence of sexual coercion in bonobos. In: Muller NM, Wrangham RW (eds.) Sexual Coercion in Primates and Humans, Harvard Univ Press, pp. 410-423.
- Robbins (2009) Male aggression against females in mountain gorillas: courtship or coercion. In: Muller MN, Wrangham RW (eds.) Sexual Coercion in Primates and Humans: An Evolutionary Perspective on Male Aggression against Females. Harvard Univ Press, Cambridge, pp. 112-128.
- van Schaik CP, Gauri R, Pradhan GR & Van Noordwijk MA (2004) Mating conflict in primates: infanticide, sexual harassment and female sexuality. In: Kappeler P, Van Schaik C (eds.) Sexual Selection in Primates: New and Comparative Perspectives. Cambridge Univ Press, p. 131-150.

- Setchell JM (2008) Alternative reproductive tactics in primates. In: Oliveira RF, Taborsky M, Brockmann HJ (eds.) *Alternative Reproductive Tactics: An Integrative Approach*. Cambridge Univ Press, Cambridge, pp 373-398.
- Smuts BB (1985) *Sex & Friendship in Baboons*. Aldine, London.
- Smuts BB, Smuts RW (1993) Male aggression and sexual coercion of females in nonhuman primates and other mammals: evidence and theoretical implications. *Advances in the study of behavior* 22:1-64.
- Steklis HD, Whiteman CH (1989) Loss of estrus in human evolution: Too many answers, too few questions. *Ethol Sociobiol* 10: 417-434.
- Stumpf RM, Boesch C (2005) Does promiscuous mating preclude female choice? Female sexual strategies in chimpanzees (*Pan troglodytes verus*) of the Tai National Park, Côte d' Ivoire. *Behav Ecol Sociobiol* 57: 511-524.
- Stumpf RM, Thompson ME, Knott CD (2008) A Comparison of Female Mating Strategies in *Pan troglodytes* and *Pongo* spp. *Int J Primatol* 29: 865-884.
- 菅原和孝 (1994) 「狩猟採集民の母性と父性：サンの場合」高畑由起夫編『性の人類学』世界思想社. pp. 204-229.
- 田島知之, イトル・マリム (2018) 「オランウータンにおける異性間食物移動から性的強制傾向が予測できる」『霊長類研究 Supplement : 第 34 回日本霊長類学会大会要旨集』 p. 36.
- Taub DM (1980) Female choice and mating strategies among Wild Barbary macaques (*Macaca sylvanus* L.) In: Lindburg DG (ed.) *The Macaques*, van Nostrand Reinhold, pp.287-344.
- Trivers RL (1985) *Social Evolution*, Benjamin/Cummings, Menlo Park.

はじめに

これまでの野生チンパンジーの研究によって、集団間や集団内の殺しなどを含む、非常に暴力的な行動をチンパンジーが行うことが明らかになってきた。しかしチンパンジーの雌雄とも暴力的なのではない。野生チンパンジー15 集団のデータを分析した Wilson 他(2014)によると、致命的な攻撃交渉の加害者や犠牲者の多くはオスだった。また、子殺しも多くの野生チンパンジーの調査地で観察されているが、子殺しを行うのはほとんどの場合大人のオスである。

チンパンジーの、性的な文脈でおこる圧力(sexual coercion) に関しては、キバレ森林で東チンパンジーを研究している Muller ら (Muller et al., 2007, 2011) やタイ森林で西チンパンジーを研究している Stumpf と Boesch (Stumpf & Boesch, 2005, 2006, 2010) が議論を続けている(高畑、本研究会での発表)。私が野生チンパンジーの研究を行っているウガンダ共和国カリンズ森林では、交尾はとくに乱婚的に行われる。発情メスを巡る交渉の中でみられるオスとメスの行動を通して、チンパンジーのオスからメスへのハラスメントについて考察したい。最後に同じ *Pan* 属のボノボにおけるオスからメスへのハラスメントについて考察する。

複数のオスによるハーディング

複数のオスによる発情メスのハーディングは、カリンズ森林の M 集団でしばしば観察されている。1 例目の事例は、2004 年 9 月 27 日に観察された仲の良い 3 頭のオトナオス (*KR*, *YW*, *KY*) と発情メス (*Sn*) の事例である。9 時間 17 分の観察中、24 回の交尾が観察され、そのうち、*KR* が 9 回、*YW* が 6 回、*KY* が 5 回、その他のオス 4 頭が 1 回ずつと、3 頭の交尾が大半を占めた。この間、オスが接近する際に、*Sn* が短い悲鳴をあげたのが 3 回観察されたが、特にハラスメントとされるような行動は観察されなかった。

2005 年 6 月 16 日に観察された、3 頭の高順位オス (*KR*, *YW*, *DO*) が発情メス *Um* をハーディングした事例では、8 時間 46 分間の観察中、12 回の交尾が観察されたが、3 頭のオスとの交尾が大半を占めた (*KR* が 3 回、*DO* が 4 回、*YW* が 3 回)。この間、近づいてくるオスをこの 3 頭のオスが追い払うなどの攻撃行動がみられたが、オスからのメスに対するハラスメントとされる行動は観察されなかった。2005 年 6 月 17 日に観察された、4 頭の高順位オス (*KR*, *YW*, *DO*, *NS*) が発情メス *Um* をハーディングした事例では、午前 8 時 56 分から 5 時間 49 分間観察された 8 回の交尾すべてが 4 頭のオスによるものだった (*KR* が 2 回、*YW* が 3 回、*DO* が 1 回、*NS* が 2 回)。この間、地上から接近したオトナオスを *KR* が追い払うことが一度見られたが、それ以外は攻撃的な交渉はみられなかった。午後 2 時 45 分に *KR* と *YW* が *Um* から去ると、地上に待機していたオトナオスたちが一斉に集まり乱婚状態になり、1 時間 45 分間で 8 頭のオスと 12 回の交尾がみられた。この間、1 頭のオトナオス (*TK*) が *Um* を追いかけて *Um* が逃げたが、*YW* が現れると *Um* が逆に *TK* を追い払うことがみられた。

オスからの暴力的な圧力はあったか？

KR が第一位オスだったこの調査時期では、上述のように複数のオスによる発情メスのハーディングがみられた。オスたちが無理矢理ハーディングしているかどうかは不明だったが、ハーディングしているオスたちからの攻撃的な行動はほとんどみられず、オスの接近に対して発情メスが悲鳴をあげることはあるものの、その直後にメスから接近して交尾をすることなどから、オスたちが強制的にハーディングしているようには見えなかった。

また、同一時期の観察でも、観察者が違うと印象が変わるようだ。古市 (2013) は、ハーディングが崩れた際の乱婚的な状態を記述し、発情メスが悲鳴

をあげ、オスが発情メスを追いかけている状況をオスからメスの攻撃としている。このように観察者による印象の違いもあることから、オスからメスへのハラスメントを考察するには、「暴力」や「ハラスメント」を客観的に定義していく必要があるだろう。

調査時期による違い

本研究会の高畑の発表によると、チンパンジーの Sexual coercion に関しては、東チンパンジーを研究している Muller らは「父性を混乱させよう」とするメスへの対抗戦略としている (Muller et al., 2009) のに対し、西チンパンジーを研究している Stumpf ら (Stumpf & Boesch, 2010) は、オスの対抗戦略としての sexual coercion もあるが、メスの female choice もメスの戦略として有効性を発揮している。さらに、同一亜種でも異なる繁殖戦略をとっている可能性 (Kaburu et al., 2015) や個体群間の相違が生態学的に説明できる可能性もある (Stumpf & Boesch, 2010) とのことである。

上述のように、KR が第一オスであった 2004 年～2014 年では、オスによる発情メスに対する攻撃的な行動はみられなかったのだが、最近の観察では、第一位オスを含むオトナオスによる発情メスへの攻撃的な行動が観察されるようになった (図 1)。第一位

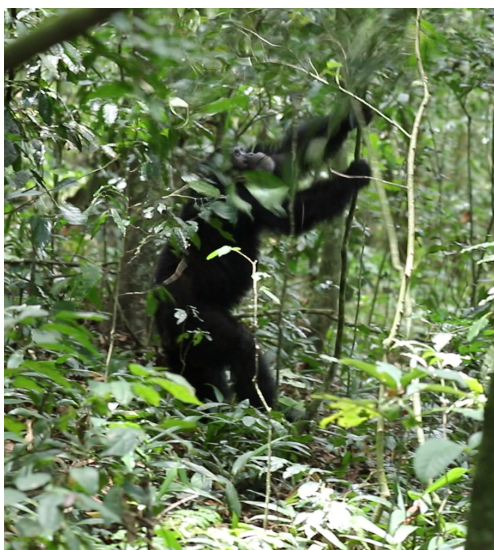


図 1. 発情メスの下で木を揺するオスのチンパンジー (古市剛史撮影)

オスが、自分と一緒に移動しない時や他のオスと交尾した時に、発情メスを叩いたりする。さらに、他のオスも、発情メスを追いかけたり叩いたりすることがある。ただし、発情メスの方には、目に見えるような傷はなく、交尾も普通に行っている。

第一位オスの KR や他の年寄りオスが消失 (おそらく死亡) した以外は、集団構成や遊動域などに大きな違いはないが、発情メスに対するオスの行動には変化がみられる。こうした変化が、オスの個性によるものなのか、オスの社会関係によるものなのかは不明だが、同じ集団におけるオスからメスへのハラスメントの頻度や種類の変化についてもさらに研究を進めていきたい。

ボノボにおける性的な暴力

一方、チンパンジーと同じ *Pan* 属に属するボノボでは、性的な暴力は存在しないといわれている (Paoli 2009, 高畑 本研究会)。そこで、本研究では、メスの外傷の跡について、ボノボとチンパンジーで比較をしてみた。チンパンジーの集団 (カリンズ森林 M 集団) 31 頭のメスのうち、12 頭に耳や口の周りに大きな傷跡があったのに対し、ボノボの集団 (ワンバ E1 集団) のメス 13 頭中 1 頭に上唇に傷があったほか、大きな傷跡はみられなかった。ただし、発情メスが大けがをしているところはあまり観察さ

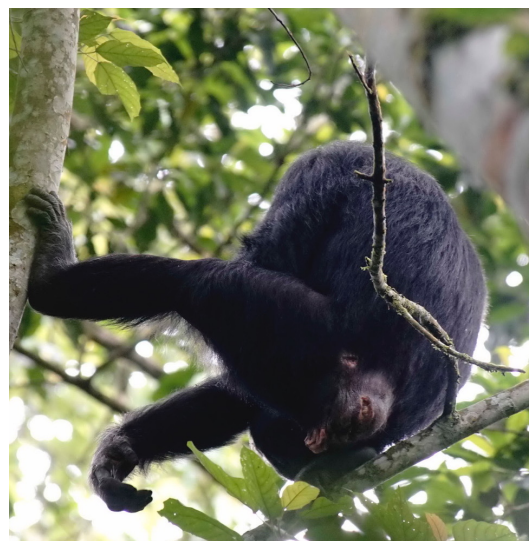


図 2. 子殺しの時に負傷したオトナメス (竹元博幸撮影)

れず、子殺しが起きるとメスが大けがをすることがあるので、チンパンジーのメスの大きな傷跡は、オスから発情メスへの攻撃でできたものではなく、子殺し（または子殺しの試み）の際にできたものかもしれない（図2）。また、ボノボの観察でも、オスからメスへの直接的な攻撃はほとんど観察されないが、メス同士の攻撃行動はしばしば観察されるので、唯一みられた上唇の傷も、オスからの攻撃ではなく、メスからの攻撃が原因の可能性が高い。

オスが圧倒的にメスに対して優位なチンパンジーに対して、ボノボのオスとメスは、社会的に対等か、時にはメスがオスに優位なときすらある。メスが優位な社会では、オスによる性的な圧力は繁殖戦略としては有効ではなく、female choiceは有効なのかもしれない。

ヒトに一番系統的に近いチンパンジーとボノボでは、オスとメスの関係が大きく異なる。さらに、チンパンジーの中でも、亜種、調査地、調査時期でも異なる可能性が高い。単なる種間における違いだけでなく、集団間や調査時期の違いとその要因を追うことで、初期人類におけるオスとメスの関係についてヒントが得られるのではないだろうか。

参考文献

古市剛史 (2013) 『あなたはボノボ、それともチンパンジー?』 朝日新聞出版。
Kaburu SSK, Newton-Fisher NE (2015) Trading or coercion? Variation in male mating

strategies between two communities of East African chimpanzees. Behav Ecol Sociobiol. 69:1039-1052.

Muller MN (2007) Chimpanzee Violence: Femmes fatales. Current Biology 17 (10): PR365-R366.

Muller MN, Kahlenberg SM, Thompson ME, Wrangham RW (2011) Sexual coercion by male chimpanzees shows that female choice may be more apparent than real. Behav Ecol Sociobiol 65: 921-933.

Paoli T (2009) The absence of sexual coercion in bonobos. In: Muller NM, Wrangham RW (eds.) Sexual Coercion in Primates and Humans, Harvard Univ Press, pp.410-423.

Stumpf RM, Boesch C (2005) Does promiscuous mating preclude female choice? Female sexual strategies in chimpanzees (*Pan troglodytes verus*) of the Taï National Park, Côte d'Ivoire. Behav Ecol Sociobiol 57: 511-524.

Stumpf RM, Boesch C (2006) The efficacy of female choice in chimpanzees of the Taï Forest, Côte d'Ivoire. Behav Ecol Sociobiol 60: 749-765.

Stumpf RM, Boesch C (2010) Male aggression and sexual coercion in wild West African chimpanzees, *Pan troglodytes verus*. Anim Behav 79:333-342.

はじめに

本シンポジウムの目的は、人間以外の霊長類種に見られる雌雄間での強引な性的交渉や関係がどのように生じるのか問い直すことで、人間社会に見られるセクシュアルハラスメントの進化的背景を探ることであったと考えている。私はこれまで、マレーシア・サバ州でボルネオオランウータンのオスの繁殖行動について研究を行ってきた。オランウータンは東南アジアに生息するヒト科類人猿の1属であり、オスは嫌がって抵抗するメスを押さえつけ、強制的に交尾を遂行することが一般的に見られる（図1）。そうした強制交尾がなぜ起こるのか、これまでの議論をもとに概説する。

オランウータンのオスの二型

オランウータンの雄には2つの形態が存在する。体重80キロに達する巨体を持ち、長い毛、大きく出っ張った頬ヒダなどの二次性徴が発達した「フランジ雄」と、体重は40キロほどで二次性徴が未発達の「アンフランジ雄」に分類される。これらは二型成熟（Bimaturism）と呼ばれ、オランウータンのオスにおいて一般的に起こる現象である。近年の研究から、フランジ雄だけでなく、形態的に未熟なアンフランジ雄も繁殖能力を持ち、子を残すことがあることがわかってきた（Utami Atmoko et al., 2009）。DNA マーカーを用いた父子判定からは、概してフランジオスの方が多くの子を残すが、アンフランジオスは受胎確率の低い未経産メスも含め、幅広い相手と交尾する戦術で子を残すことがわかってきた（Tajima et al., 2018）。

オランウータンの交尾様式

オランウータンの雌雄が交尾に至る基本的なパターンは、オスとメスが1対1でコンソート関係を結び、遊動を共にする間に交尾が起こるというもので



図1. フランジオスによる強制交尾の様子、樹上で抵抗するメスを押さえつけ、噛みつく行動が見られるがメスが負傷した観察例はない。

ある。それ以外にもメスとの出会い頭に交尾をして別れるパターンもある（Utami Atmoko et al., 2009）。このコンソート関係はあまり長続きせず、ボルネオ種では数日～1週間ほど持続するとされる（Mitani, 1985）。またメスには発情や排卵の外部兆候が無いことから、外見から発情しているかどうか見極めるのは困難である（Knott et al., 2010）。しかしながら、オランウータンのオスを観察していると、頻繁にメスに対する性器検分を行うことから、繁殖適期の推定も可能なのかもしれない（Tajima et al., 2018）。

一般的にオランウータンの交尾頻度は極めて低い。ボルネオ島のグヌンパルン国立公園で調査をしたKnottは10年間に4.5万時間の個体追跡をした中で、21例のみしか観察できていない（Knott et al.,

2010)。

オランウータンにおける強制交尾

野生オランウータンの生態を調査した MacKinnon(1974)以来、ボルネオ島とスマトラ島のあらゆるサイトにおいてオスが抵抗するメスに対して示す強制交尾 (forced copulation) の観察例が報告されている (Knott, 2009)。しかし、そうした強制交尾によってメスが負傷した事例が報告されていないため、メスが何らかのコストを負うことを条件としている Sexual coercion についての Smuts & Smuts (1993) による定義に当てはまるかどうかは不明である (Knott, 2009)。

オスの繁殖戦略の観点

強制交尾に至る要因について、まずはオスの繁殖戦略の観点から考えてみたい。メスに発情兆候が無いために繁殖適期がはっきりとはわからない。単独性の強いオランウータンでは、強いフランジオスであっても常にメスをメイトガードすることが困難である。フランジオスがメスとのコンソート関係を持つのは長くて数日であると報告されている (Mitani, 1985)。形態学的な観点からも、オランウータンのオスの繁殖戦略が単独性と密接に結びついていることが示唆されている。太い輸精管や大きな精子の先体形状は、オランウータンが少ない交尾回数の中で受胎確率を上げる方向に適応していることを示唆している (Fujii-Hanamoto et al., 2011)

このようにオランウータンのオス間の繁殖を巡る競合は極めて激しい。またそもそも出産間隔が 7.5

年と長いことから (van Noordwijk et al., 2018)、オスは繁殖可能なメスに出会う確率が低いと考えられる。オスにとっては、ひとたびメスと出会えば次にいつ交尾機会が巡ってくるのかは予測不能であり、目の前の交尾機会を最大化するのが最適戦略となると考えられる。つまり、強制交尾は弱いフランジオスやアンフランジオスといった、あまりメスに好まれないオスによる代替繁殖戦略として解釈可能である。その一方で、アンフランジオスが常に強制交尾を行うわけではないことにも注意が必要である。メスがアンフランジオスとの間で平和的に交尾をし、受胎に至った事例も報告されている (Utami Atmoko et al., 2009; Knott, 2009)。図 2 のように、段階を経て徐々にアンフランジオスがメスへ接近するという平和的なインタラクションが見られることも珍しくない。また、Galdikas は行動観察から、強制交尾によってメスが受胎した例はなかったと述べている (Galdikas, 1985) が、これは遺伝的な解析結果に基づいた主張ではない。オスによる強制交尾が実際にどれくらいの繁殖成功に繋がっているのかどうか定量的に明らかにした研究はこれまでのところ存在しない。

メスの繁殖戦略の視点

オランウータンは霊長類の中でも特に子育てに多大な時間と労力がかかり、出産間隔が長いので、メスが生涯に出産する子の数が少ない。そのため、オランウータンのメスは繁殖相手として優秀なオスを選び好みする傾向が特に強いと考えられている (Knott, 2009)。実際に尿中の性ホルモン代謝物を

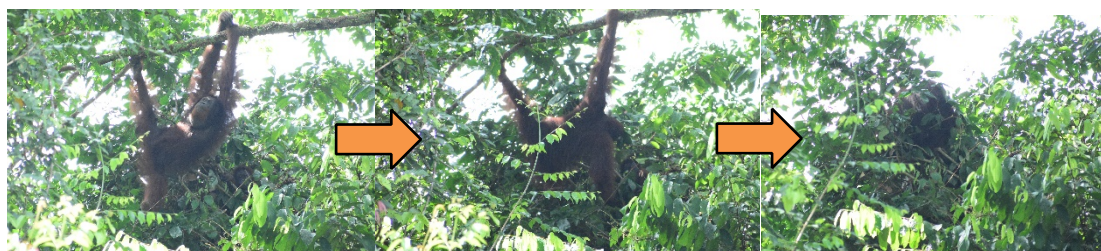


図 2. アンフランジオスによるメスへの非暴力的な接近 (左) ネスト内で休息中のメスにゆっくりと接近する (中) メスの顔にのぞきこみ行動を示す (右) メスのネストへ入る。

測定し、メスの発情状態を推定した研究からは、メスは受胎確率の高い周排卵期に、地域で最優位なフランジオスと交尾していたことが報告されている。(Knott et al., 2010)。一方で、非発情状態にあると推定されるメスは、優位でないフランジオスやアンフランジオスとの交尾が多かったと報告されている (Knott et al., 2010)。

こうした背景から、繁殖適期の訪れたオランウータンのメスは、繁殖相手として好ましくないオスとの交尾を拒み、激しく抵抗する傾向が強くなると考えられている。そうした雌雄の繁殖戦略が衝突した結果として、強制交尾という激しいインタラクションが展開されるのではないかと考えられている。

結論

オランウータンにおける強制交尾はオスが単独で取る行動様式というわけではなく、少ない交尾機会を逃したくないオスと、相手を選び好みたいメスの間で繰り広げられるインタラクションであると捉えられるだろう。ヒト以外に「レイプ」をする動物として、オランウータンのオスはその悪名を轟かせる存在でもあるが、雌雄の繁殖戦略の不一致とそれに伴う強制交尾は、他の多くの動物でも共通して見られることから、オランウータンにおいてのみオスの強制的な性行動傾向やメスに対する暴力性が進化したというようなことは考えにくい。同様にヒトにおけるセクシュアルハラスメントにも、様々な社会状況や文化的背景が複雑に絡みついていることは当然としつつも、生物学的な基盤が存在することは明らかであり、霊長類だけに留まらない幅広い系統にまたがる動物学の知見をもとに検討する必要があるであろう。

残された課題

オランウータンにおける強制交尾は「モテないオス」の代替繁殖戦略としてだけでは説明できない要素もある。最も優位なフランジオスの方が、むしろ強制交尾を示した割合が高かったという矛盾した傾向も同時に報告されているためである (Knott et al., 2010)。メスが常に最優位なオスを交尾相手と

して選んでいるとも限らない可能性があり、どのようなオスを配偶者として選択しているのか、今後の研究が待たれる。また、強制交尾がメスに対して負わせる具体的なコストについても今後詳しく調べる必要がある。これまでのところメスが負うコストとして、採食時間の低減、性感染症、優秀でないオスの子を受胎するなどが挙げられる (Knott, 2009) ものの、それぞれの要因がメスの生存と繁殖成功にどれほど寄与するかについてはわかっていない。

参考文献

- Fujii-Hanamoto H, Matsubayashi K, Nakano M, et al. (2011) A comparative study on testicular microstructure and relative sperm production in gorillas, chimpanzees, and orangutans. *Am J Primatol* 73:570-577.
- Galdikas BMF (1985) Subadult male orangutan sociality and reproductive behavior at Tanjung Puting. *Am J Primatol* 8:87-99.
- Knott CD (2009) Orangutans: Sexual Coercion without Sexual Violence. In: Muller MN, Wrangham RW (eds) *Sexual coercion in primates and humans: an evolutionary perspective on male aggression against females*. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, pp 81-111.
- Knott CD, Emery Thompson M, Stumpf RM, McIntyre MH (2010) Female reproductive strategies in orangutans, evidence for female choice and counterstrategies to infanticide in a species with frequent sexual coercion. *Proc R Soc B Biol Sci* 277:105-113.
- MacKinnon J. (1974) The behaviour and ecology of wild orang-utans (*Pongo pygmaeus*). *Anim Behav*, 22(1), 3-74.
- Mitani JC (1985) Mating behaviour of male orangutans in the Kutai Game Reserve, Indonesia. *Anim Behav* 33:392-402.
- Smuts BB, Smuts RW (1993) Male-Aggression and Sexual Coercion of Females in Nonhuman-

Primates and Other Mammals - Evidence and Theoretical Implications. Adv Study Behav Vol 22 22:1-63

Tajima T, Malim TP, Inoue E (2018) Reproductive success of two male morphs in a free-ranging population of Bornean orangutans. *Primates* 59:127-133.

Utami Atmoko SS, Mitra Setia T, Goossens B, James SS, Knott CD, Morrogh-Bernard HC, et al. (2009) Orangutan mating behavior and

strategies. In: *Orangutans: Geographic variation in behavioral ecology and conservation*, 235-244.

van Noordwijk MA, Utami Atmoko SS, Knott CD, Kuze N, Morrogh-Bernard HC, Oram F, et al. (2018) The slow ape: High infant survival and long interbirth intervals in wild orangutans. *J Hum Evol*, 125, 38-49.

なかなか難しいテーマである。

よく知られているように、セクハラを厳密に行動パターンだけで定義することはできない。もちろん明らかにアウトな行動があるのは間違いない。だが、たとえば、男性が女性に対して「髪切ったの？似合ってるね」とか「今度二人で食事しようよ」とか言うことがセクハラに当たるのかどうかは、この男女のこれまでの関係性や文脈に依存する。おそらく男性の側は、女性を不快にしようとしてこういったことを言っているわけではない。だから多くの場合、受け手の側の女性がこの言説をどう受け止めるか、ということによってセクハラになったりならなかったりする。

このように、同じ行動が関係性や文脈、そして受け手によって異なる意味を帯びるというのは、ヒト以外の霊長類（以下「霊長類」とする）でも普通にありそうである。たとえば、チンパンジーのオスがメスに対して激しくつるを揺するという行動を考えてみよう。メスの側もそのオスと交尾をしたいと思っていれば求愛のシグナルになりうるだろうし、メスの側にその気がなければ嫌がらせにもなる。そもそも「行動」を文脈から切り離して大量に集めて、統計的に分析するといった、現在主流の研究方法では、文脈依存である現象をきちんと捉えることはそう簡単ではないのかもしれない。

今回のシンポジウムの中で紹介されていた霊長類の行動の多くは、人間社会の中で問題となっているセクハラとは多少ずれていたような気がする。これは、上で述べたように、「受け手がどう捉えたか」を霊長類で——とくに野生下で——把握することが難しいからでもある。行動を記述するしかない以上、目に見える形でメスが不利益を被っているような現象が扱われることになる。霊長類の「性的威圧」も「強制性交」も、「物理的な強制力の行使」を伴って

いる。「噛みつく」、「叩く」、逃げられないように「押さえ込む」といった類のものである。

ヒトのセクハラでも、物理的な接触を伴うことはある。たとえば、「触る」、「抱きしめる」、「肩を抱く」といったものである。だが、このような接触は、親和的なカップルの間では強制力の行使ではない。こうした接触は本来「攻撃的」なものではなく、むしろ「求愛」の一貫であるとか「親愛の情」を示すもののはずである。霊長類で同等のものを探すとすれば、毛づくろいや抱擁行動などが該当するだろう。繰り返しになるが、ヒトにおいてこうした求愛行動や親和的行動がセクハラになってしまうのは、あくまで受け手側がそれを不快に思うからである。

性的威圧のような、直接的にしる間接的にしろ、交尾に至るための何らかの「物理的な強制力の行使」を伴う現象をヒトで見つけるとすれば、それはセクハラというよりもむしろ性的暴行やDV（配偶者暴力）であろう。ここで、ヒトの男が女を殴るようなものは明らかに「暴力」だとされる。だとすれば、性的威圧の際に霊長類のオスがメスに噛みつくのもまた「暴力」か——。

「暴力」をどう定義するのもまた、非常に難しい問題である。「物理的な強制力の行使」を必ずしも暴力と呼ぶわけではない。たとえば法学的には不法な物理的強制力の使用のみを暴力と呼ぶ。従って、警察が犯人を逮捕する際のような、法に則った実力行使は、「暴力」とは見なされない。この意味では、そもそも法のない霊長類では暴力は定義しえない。一方、政治学などでは正当か不当かは問わず、物理的強制力の使用一般を暴力と呼ぶことが多いようだ（したがって、警察の実力行使も暴力である）。こちらの意味では、性的威圧はほぼ常に暴力を伴うと言えるだろう。

しかし、どのように定義するとしても、「暴力」という語は、やはり価値を帯びた語である。そしてそれは、否定的な価値であり、一般的には避けるべきものだと思えられることがほとんどだろう。「暴力」だけに限らず、「セクハラ」や「レイプ」、「戦争」、「虐殺」といった、否定的な価値を帯びた語を、霊長類の社会を記述する際に安易に用いるべきかどうか——これについては今後も丁寧な議論が必要かもしれない。

シンポジウムの中ではそれほど議論がなされなかったが、オスメス間の「優劣」にも触れておこう。ヒトのセクハラの問題でも、霊長類の性的威圧の問題でも、オスがメスよりも「優位」であることと関連が深いとされることが多いからだ。

ヒトも含めて多くの霊長類ではオスの方がメスよりも体が大きく力強い。このため、優劣序列があるような種では、多くの場合オスがメスよりも「優位」であると言われる。ニホンザルやヒヒ、チンパンジーなどがそうである。そして、性的な文脈でオスによる「物理的な強制力の行使」が可能となるのは、端的にはオスの方が力が強いからである。このような力の行使を「暴力」と捉える立場に立てば、暴力を振るう側が「優れた位」にあるという言い方になる。これは、少なくとも現在の人間社会の通念とは相容れない。

加えて言うならば、純粹に行動学的な意味でも、そもそも異性間の「優劣」が同性間の「優劣」と同質のものと考えてよいかどうかは微妙である。たとえばニホンザルの場合、メス同士の「優劣」は、必ずしも身体的な大きさや強さで決まるわけではない。このことは、劣位家系のオトナメスが、まだ体の小さい優位家系のコドモメスの接近を避けるといったことから明らかである。一方、オスがメスよりも優位だと言う場合、それは概ねオスの方が身体的に大きく強いことによって決まっているように見える。

チンパンジーの場合、「優劣」を決める指標とされるパント・グラントという音声は、ほぼ例外なくメスからオスへ向けられる (Bygott, 1974)。この音声を発するほうが劣位であるとされているため、全て

のオスは全てのメスよりも優位であるとされる。しかし、たとえば物や場所へのアクセス優先権という基準では、むしろメスの方がオスよりも優位になることすらありうる (Noë et al., 1980)。

ニホンザルの場合もチンパンジーの場合も、優劣交渉で圧倒的に多いのは優位者側の力の行使ではなく、むしろ劣位者側の行動（避ける、パント・グラントを発する）であるという点も忘れてはならない。この意味で、性的文脈でオスがメスを攻撃するような行動は、通常の優劣交渉で生じているものと少々異なる可能性がある。

ある社会的競合が、双方にとって同等に価値のある資源を巡って生じているとしよう。その結果として資源を得た者が「優位」で、得られなかったものが「劣位」であるとする考え方は理解しやすい。高い年収を得ている人を「勝ち組」、それらを得られなかった人たちを「負け組」と呼ぶのと、おそらくそう違いはない。

攻撃的交渉が、そうした価値のある資源へのアクセス権を巡って生じるような場合（たとえばオス同士が発情メスを巡って争うような場合）、たしかにこのイメージと合致する。勝者となるには、相手を資源から遠ざけてしまえばよい。一方で、オスが性的な文脈でメスを攻撃する場合はどうか。オスが求めているのは、その攻撃相手であるメス自身との交尾であり、相手を遠ざけてしまっては身も蓋もない。メスの場合、オスに勝ってまで得るような「資源」はない。そのオスを拒絶することで得られるものは、ひょっとしたら別の「より優れたオスとの交尾」ということになるのかもしれないが、当該オスにとって、それが「価値のある資源」ではないのは明らかである。つまり、性的文脈での攻撃交渉は、双方にとって同等の価値を持った資源をめぐる争いではない。

したがって、同性個体間の攻撃と、性的な文脈でのオスからメスへの攻撃は、同じ「攻撃」であっても、その機能や帰結などが大きく異なる可能性がある。本来、行動学的な意味での優劣は、同じタイプの相互交渉の結果を用いて定義されなければならない。「優劣は相互交渉の種類によって異なりうる」

(Tufto et al., 1998) からだ。例えて言えば、大相撲の番付での最優位者である横綱と、ボクシングのランキングでの最優位者であるチャンピオンのどちらが「優位」なのかを問うことには意味はないのだ。そうすると、霊長類の性的威圧で生じている攻撃やその結末を、一般的な「優劣」と同じ路線で議論してよいのかということについても、もう少しきちんと検討する必要があるのかもしれない。

参考文献

- Bygott, J. D. (1974) Agonistic Behaviour and Dominance in Wild Chimpanzees. PhD Thesis Cambridge University of Cambridge.
- Noë, R., de Waal, F. B. M., and van Hooff A. R. A. M. (1980) Types of dominance in a chimpanzee colony. *Folia Primatologica* 34: 90-110.
- Tufto, J., Solberg, E. J., and Ringsby, T. H. (1998) Statistical models of transitive and intransitive dominance structures. *Animal Behaviour* 55: 1489-1498.

ヒト研究と霊長類研究は架橋できるか

本シンポジウムの課題は、霊長類の事例に基づきながら、性と暴力との関係を進化人類学的にどう考えるか、そこにどんな可能性を見出せるか、という点にある。しかし私は、ジェンダー研究者としてコメントーターを引き受けたものの、霊長類学および進化人類学についてはほぼ知見をもたず、とはいえ、ヒトのジェンダー問題の知見をそれらに当てはめてコメントすることも困難かつ危険であることを痛感した。その危険性とは、いうまでもなく、霊長類の事例とヒトの事例双方にかんして、用語や概念などを十分に議論せずに利用・流用したり、比較したりすることの有害さである。たとえば「セクハラ」という語に関しても、それが、ここ数十年のヒト社会において使われるようになった語であることを考えると、はたしてこの語の使用が進化人類学の議論においても適当なのか、または有効なのかという疑問は、すぐに出てくるに違いない。

しかし私は、だからといって、その危険性を指摘するだけで、両者を架橋する可能性を放棄することも非生産的なのではないかと、このシンポをきっかけに考えるようになった。そして、ではなぜ架橋できないかを考えていくと、その問題は、実は、現在のジェンダー研究が抱える根源的な課題につながっていることにも気づいた。

したがってここでは、むしろ（私自身の問題としても）ジェンダー研究側に立ち戻って、その姿勢を再検討することを主眼とする（霊長類学の業績にコメントする資格はやはりない）。そして、そこから両研究の架橋を見据えて、本シンポジウムで刺激を受けた「進化」や「性淘汰」という考え方に触れながら、いくつかの考えを述べてみたい。もちろん、進化等に対する私の理解はまだ十分ではないが、今後、両研究が生産的に議論を交わしていくきっかけになればと考える。またそれゆえに、本稿はシンポジウ

ム時のコメント内容と少々異なっていることも断っておく。

生物学側面を隠蔽したジェンダー研究

まず、「セクハラが進化人類学は可能か」という、本シンポジウムの問いにおける「セクハラ」は、本稿では以降、(シンポでもそうした議論があったように) 性的な暴力全般に拡大して議論していく（もう一つ、「暴力」の定義という問題もあるが、ここではとりあえず攻撃とみなす）。

とすると、この問いは「性暴力の進化人類学は可能か」になるが、現在のジェンダー研究からみると、この問い自体が性暴力を本能などの生物学的基盤に帰するものであると警戒され忌避されることが多い。性暴力を含めた性の問題は、現在では、ジェンダーという概念に代表されるように、文化社会的な産物とされているからである。

周知の通り、1960年代以降、フェミニズムの影響下、性や性差は「生まれ」ではなく「育ち」であると思なされるようになり、ジェンダーという言葉が使われるようになった。しかしこれによって、性や性差が生来のものか後天的なものかという問いに決着がついたわけではなく、むしろ隠蔽されたと見なす批判もすぐに出てきた（バトラー、1999）。というのも、ジェンダーは、性の生物学的な側面を（縮小したとはいえ）否定したのではなく、セックスという言葉で温存していたからである。実際、ジェンダー研究者は以降も、ジェンダー面の諸問題には積極的に取り組んできたが、セックス面については放置してきた。セックス面に言及すること自体が性の生物学的基盤を露わにするとして、議論自体を避ける傾向も強かった。この傾向は、それを乗り越えようとする試みは若干あるものの（宇田川、2018）、基本的には今も続いている。

進化という視座の可能性

ところで、この生物学アレルギーともいえる姿勢の背後にあるのは、生物学的側面と社会文化的側面とを、あまりにも二項対立的で二者択一的に認識しているという問題である。それは、自然／文化、本能／学習という対立図式であり、さらには、文化をもち学習能力をもっているヒトと、自然に囚われ本能で行動する動物とを明確に区別するとともに、ヒトを特別視する考え方である。ではこの考え方をどう乗り越えるのか——そこには、冒頭でも述べたように「進化」の概念・視座が重要な示唆を与えてくれるかもしれない。

もっとも、進化は、生物学的決定論の最たるようにも見えるし、実は私も、正直に言えば、そういう印象を強くもっていた。しかし、長谷川ら（2000）によると「進化とは集団中の遺伝子頻度が時間とともに変化すること」（22 頁）であり、関心の中心にあるのは、遺伝子自体ではなく、その変化（進化）である。そして、遺伝子の変化は「適応」「淘汰」によって起こるものとされており、ゆえに、遺伝子と個々の生物が生存している環境との間に複雑な関係があることが議論の前提になっている。

とするならば、この考え方は、生物学側面（遺伝子）もけっして不変で本質的・決定的ではなく、むしろ（その変化が、環境やそこでの生物の行動との適応関係に依拠しているという意味で）他との関係の中で発現することを示唆している。

たしかに、その変化の速度は遅く、ヒトの尺度からは決定的なようにも見える。しかし、そう考えることは生物学的側面への理解を誤らせる。また、ヒトの場合、行動は遺伝子ではなく文化によって規定されているという見方もある。しかし文化も、ヒトが行動する場という意味では一種の環境であり、ゆえにヒトの生物学的側面と適応関係にあると考えることは可能である。ここからは、ヒトに関しても「生まれ」と「育ち」との関係を根本的に再検討する必要性が出てくる。ヒトの文化は、まったく「白紙」の上に作られているのではなく、進化という、いわばより長い時間の中で作られてきた、遺産とも

いえる生物学的な側面との複雑な作用の中にあるのである。

あらためて、性暴力

さてこの進化論の考え方は、自然／文化の二項対立的図式を乗り越えるための鍵の一つになるのではないだろうか。これは、進化論者にとっては当たり前の考え方かもしれない。ただし、性という、生物学的側面との関連を無視できない領域を扱っているにもかかわらず、これまで関心すらもたなかったジェンダー研究者にとっては、この考え方がもたらす意義は非常に大きいに違いない。

もちろん、本格的な議論にはまだ時間がかかるだろうが、ここでは残された紙面で、本シンポジウムのテーマ、性暴力に戻り、それを新たな視座からどう論じ直すことができるのか、その端緒になるような点を（思い付き程度だが）いくつか述べておきたい。

すでに述べたように、これまでのジェンダー研究では、性暴力の原因を社会文化的なものとし、生物学的に論ずることはなかった。ましてや、本シンポジウムのように、霊長類等の他動物と関連させながら性暴力を（この語が適切か否かも含めて）考え直す議論には参画することもなかった。しかし性暴力は、そのあり方が多様とはいえ、どの社会文化でも男性から女性へのものが圧倒的に多く、それを男性の生まれながらの性質に結びつける論法は一般的には広く普及している。とするならば、なぜ性暴力は圧倒的に男性に多いのかという問いを放置しておくことは、やはりジェンダー研究の怠慢であろう。フェミニストの中からも、女性はすべて「育ち」によって作られるとみなす構築主義的な見方に対して、「ではなぜ女性は夜道が怖いのか」（つまり、女性はやはり本質的に女性ではないのか）と反発する声も少なくない（宇田川、2007）。生物学的な決定論に陥らずに、性暴力と生物学的側面の関連をどう論じていくのか、そしてそこでは、霊長類をはじめとする他動物との比較も可能になるのか——この問いは、ジェンダー研究の今後の可能性を占う試金石の一つとなるかもしれない。

性淘汰と雌雄の繁殖戦略

さて、この問題にかんしても、進化論における「性淘汰」という知見が非常に示唆的である。むしろこの視座のもとで、霊長類とヒトとの二者間比較だけでなく、両者を動物全体の性行動のなかであらためて考察していくならば、(本稿の最後で触れるように)性暴力についての議論はより明瞭かつ生産的になっていくとも思われる。

ここでも長谷川ら(2000)の議論を参考にすると、まず性淘汰論で注目すべきは、繁殖・配偶という行動が、雌雄が互いに自分の遺伝子を優先的に残そうと葛藤する場として捉えられている点である。雌雄はそれぞれ、そのために多様な繁殖戦略を発達させており、そうした戦略はしばしば、「配偶者獲得の機会をめぐる競争(同性間、多くは雄間競争)」と、「より良い配偶者の選り好み(多くは雌による雄の選択)」とに分けて説明される。ただし戦略の実態は、雌雄の利害や望みが往々にして合致せず、それぞれの戦略がぶつかりあい変化していくことによってさらに多様化し、複雑な様相を呈していることも、近年の進化生物学の成果から明らかになっている。

たとえば、雄間競争において不利になりがちな雄の側も、それなりの戦略をもっている動物は多いという。強い雄の周辺でうろつきながら雌と配偶する機会をうかがったり、強い雄が交尾をしようとする寸前に雌を奪って交尾したりする戦略である。また、雄による子殺しも、雄が自身の遺伝子を残そうとする戦略だが、一方、近年注目されている雌の多数回交尾やペア外交尾は、そうした雄からの攻撃(による損失)を避けるために父性を攪乱させる雌の戦略ではないかといわれている。また、子育ても、進化生物学からみると繁殖戦略の一つとして説明することができるという。というのも、自己の遺伝子を残すためには、受精後も子が適切に成長するまで育てることは有効な戦略だからである。とくに、卵という大きな配偶子をもつ雌の場合、その生産にコストがかかり、数も少ないため(一方、雄の精子は小さく、すぐに多量に生産できる)、子育ては少ない配偶子になるべく多く育て上げようとする戦略として有効である。しかし雄の側も、多くの鳥類や魚類のよ

うに、そうした戦略をとる雌に気に入られる要素として子育てへの協力を自らの戦略に組み込み、実際に子育てを行う動物もいる。

これらはほんの僅かな事例にすぎない。しかし、こうした進化生物学の研究からは、ある動物の性・性差(その形態・生理・行動などの差)とは、雄雌がその環境に合わせながら互いの繁殖戦略を戦わせてきた淘汰の所産であるとみることができるのである。

配偶者防衛と性暴力

とするならばヒトにも、そうした性差の進化的な側面はあるのではないだろうか。たしかにヒトの場合、その性・性差は文化的な多様性が大きく、たとえば少なくとも現在の子育てのあり方を性淘汰の所産とみなすことはできない。ただしヒトにとっても繁殖は重要な課題であり、よって、それをめぐってヒトの雄雌(男女)がいかなる性淘汰を行ってきたのか、どんな戦略を戦わせてきたのか等々、進化生物学の次元からの考察は必須であろう。現在のヒトの性のあり方を理解していくためには、その進化を踏まえつつ、環境や歴史の中で文化的な違いがどう構築されてきたのか、その複雑な関係を紐解くことが肝要になってくると考えられる。

そして、とくに性暴力というテーマを考えていく場合、まずは、そもそも繁殖が雌雄の闘争の場であるという進化生物学の基本的な視座(雌と雄には、利害やえり好みの差があり闘争につながりうるということ)は有益だが、それだけでなく、その具体的な戦略の一つ、「配偶者防衛」という議論も非常に興味深い。これは、とくに雄の精子間競争や雌の多数回交尾がみられる場合(つまり、配偶後に自分の精子が受精に使われるかが不確実な場合)、雄が、配偶後も確実に自分の精子が受精され子ができるように、配偶した雌を他の雄(との配偶)から防衛するという戦略である。トンボのタンデム飛行が有名だが、これは雄がしばしば雌の行動を強制的に制限する行為にもなる。その際、雌に傷を負わせるような攻撃が行われることもある。そしてこの雄の配偶者防衛が、雌側にはどんなコストやメリットをもたらすの

か、また、どんな雌雄関係を背景に配偶者防衛が起こるのか等についても、進化生物学ではすでに多くの議論が交わされているという。

とするならば、ヒトの性暴力やセクハラも(今回のシンポジウムで報告されたマントヒヒの雌への neck-bite 行為をはじめとする霊長類の sexual coercion も)、この配偶者防衛という観点から考察していくことができるかもしれない。もちろん、現在のヒトの性暴力は単純な進化による産物ではない。また、それらのほとんどは繁殖を直接の目的にするものではなく、ゆえに正確には配偶者の防衛とはいえないだろう(マントヒヒの neck-bite も非発情の雌に対することが多いという)。ただし、ヒト雌(女)の発情期は他の動物と異なり、その徴がきわめて分かりにくく、さらに交尾に関しては発情期以外でも受け入れが可能である。この生理的特徴を、雌側による父性攪乱の戦略とみることができるなら、ヒト雄(男)の性暴力とは(直接的な繁殖目的はもたなくとも)、ヒト雌(女)の攪乱戦略への対抗として発達してきた配偶者防衛(あるいはその延長線上の産物)として考えることも可能かもしれない。

性暴力の進化生物学は可能か

以上はすべて仮説(というよりも「私」説)にすぎない。また、既に触れたように、どの繁殖戦略もそれ自体として存在しているのではなく、雄雌の争いの中で発達してきたものであり、同時に環境やその集団のあり方等とも深く関わっている点にも十分に注意すべきである。したがって一つの戦略だけを切り取って考察したり、その戦略だけに注目して他の動物と比較したりすることは適切ではない。ヒトの性暴力についても、それが配偶者防衛と見なせるか否かは二義的な問題であり、まずはヒトの性行動全般を「繁殖戦略」という視点から考察し直し、その進化論的な性差の特徴を様々な側面から明らかにする必要がある(すでに長谷川ら(2000)に試論がある)。そして、その中で配偶者防衛的な行為を位置づけて意味を考察していくとともに、それらが現在の多様な性暴力とどうつながっているのかについても丁寧に検討すべきだろう。道のりは決して短くない

が、こうした考察の蓄積の中で私たちはようやく「なぜ女性は夜道が怖いのか」という問いに迫っていくことができるに違いない。

ただし、同様の作業をそれぞれの動物に関しても行っていくならば、ヒトと霊長類との比較だけでなく、他の動物との比較も可能となるだろうことを最後に付け加えておく。すでに進化生物学においては多くの議論や論争があることは先に述べた。それらと適切で慎重な議論を交わしていくことができれば、そもそも性暴力とは何か、性と攻撃性との関係とは何か等々についても、生物学的側面との関連も考慮に入れた、より根源的な議論への道筋が見えてくるかもしれない。

これは、ヒトの性暴力を考える上で看過できない問いである。その意味でも、今後、性暴力について(この語の是非についても)進化生物学的な視座を含めた議論を行っていく意義は決して小さくなく、その余地も大きいと私は考える。実際、シンポジウムではさらに、ヒトの性の特徴として、性の日常化(発情などの周期性をもたない性)、性の不可視化(性の私化)、性の生殖からの分離等についても話題となり、それらがヒトの性暴力の特徴と関与しているのではないかという指摘がなされた。たとえば、ヒトの性の日常化と性の不可視化は、雌の父性攪乱と雄の配偶者防衛という繁殖戦略の観点から論ずるならば、さらに興味深い考察につながるだろう。また、ヒトの性暴力は、他の霊長類や動物以上に激しいのではないかという指摘もあり、それらを印象論にとどまることなくどう考えていくかは、今後の重大な課題の一つとなる。もはや紙面がつかたので、これ以上論ずることはできないが、性と暴力・攻撃というテーマは、ジェンダー研究のみならず、霊長類学、進化生物学など、それぞれが他分野との架橋を積極的に進めていく中でより深く豊かな議論につながっていくことは間違いない。残されている課題は多く、ジェンダー研究者の私としては、今後ジェンダー研究の側からそうした動きを進めていきたいと考えている。

参考文献

宇田川妙子 (2007) 「序章」 宇田川妙子・中谷文美編
『ジェンダー人類学を読む：地域別・テーマ別基本
本文献レビュー』 世界思想社. pp. 1-17.
宇田川妙子 (2008) 「ジェンダーとセクシュアリティ」
桑山敬己・綾部真雄編 『詳論 文化人類学：基

本と最新のトピックを深く学ぶ』ミネルヴァ書房.
pp. 75-91.

長谷川寿一，長谷川眞理子 (2000) 『進化と人間行動』
東京大学出版会.
バトラー，ジュディス (1999) 『ジェンダー・トラブ
ル』 (竹村和子訳) 青土社.

分科会事務局

京都大学大学院理学研究科 自然人類学研究室内

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

電話:075-753-4083

ファックス:075-753-4083

e-mail: shinkajinrui AT gmail.com

http://anthro.zool.kyoto-u.ac.jp/evo_anth/evo_anth.html